

アルケイアー記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 一三三―一五〇頁

南山アーカイブズ

特集Ⅱ「展示を利用した自校史教育の可能性」

大学における自校史の教育と展示

永井英治

南山大学人文学部人類文化学科

Education and Exhibition on One's Own University History

Department of Anthropology and Philosophy, Faculty of Humanities,
Nanzan University

NAGAI Eiji

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.133-150
Nanzan Archives

はじめに

一 アーカイブズにおける展示活動

二 自校史／自校教育

1 自校（史）教育の目的

2 自校史教育と「負の歴史」

三 展示の利用

おわりに―展示制作後の反省と課題

大学における自校史の教育と展示

永井英治

はじめに

本稿は、シンポジウムでの報告に当日の質疑等を加味して再構成したものであり、その目的は、大学における自校史教育において、どのように展示を利用できるかを考えるための予備作業として位置付けられる。

はじめに、自校史教育としての展示利用と、大学史展示を公開して社会に積極的に発信していくという二つの方向性について論じておきたい。^[1] 南山アーカイブズ常設展示室は広く一般に公開されるべきであるという指向は、開設準備ワーキンググループでも共有されたが、自校史教育の利用という方向性との間にどのような整合性を設けるか、議論の中で有効な解決方法は見出し得なかった。一方を強調すればもう一方が手薄になることは目に見えていたが、絶妙なバランスをとるという机上の結論は実際には解決にならないと考えた。

とくに、自校史教育の利用と社会への発信という二つの指向は、展示見学者にどのような人々を想定するかの問題と直結し、それはそのまま展示の構成や説明パネルの文章、展示図録の編集方針にまで影響する。しかも、ひと

たび開設されてしまうと大きな変更は容易ではない。仮に、大学構成員（教員・職員・学生）を見学者として想定するのであれば、展示の構成は個別大学沿革史になることがふさわしいのか、広く一般の見学者を想定する場合は、大学が立地する地域の歴史への関心を惹くものでなければならぬのか。実際にはそれぞれが入り交じり、さらに、大学が移転した場合、旧キャンパスが立地した地域を展示に取り込むことにかつての大学構成員つまり卒業生や旧教職員の関心を集めるであろうことは容易に想像できる。

南山アーカイブズ常設展示室の開設に携わった者として意識したことは、南山学園が経営する諸学校の設置や移転、制度改革についてできるだけその背景に関する情報を含む史料・パネルを配置することであった。それは個別学校沿革史にとどまらないようにするための模索であったが、個別学校沿革史の肉付けをほんの少し豊かにしようとしたに過ぎないとも評されよう。そうであれば、まずは自校史教育に資する努力をいささか試みたと弁明しなければならぬが、言い換えれば地域の中の学校という視点はほぼ全面的に今後の課題となってしまったことになる。では、南山大学における自校史教育に南山アーカイブズ常設展示室はどのように利用され、その試みはどのように「大学における自校史教育での展示利用」一般に貢献できるのか。本稿の課題は、二兎を追うことを諦め、「地域の中の学校」という視点を今後に委ねた上で、表記の課題について考えていくための準備作業である。

なお、本稿でのアーカイブズとは、組織資料アーカイブズと資料収集アーカイブズという二つの機能を併せ持つ、現在の日本で多くが事実上、そのように機能しているアーカイブズを念頭において論を進める。

一 アーカイブズにおける展示活動

アーカイブズは、利用者が見たいと思う資料をそれぞれ個別に見るための施設である。他の見学者とともに同じ展示を見る博物館とは、この機能において大きく異なっている。

しかし、現在の日本のアーカイブズでは、展示活動が一般化している。こうしたアーカイブズ本来の機能ではない活動が主流になるのは本末転倒であるのかもしれないが、既成事実的に展示は広く行なわれ、また、アーカイブズに対する社会的認知の現状では、広報活動として社会に露出しやすい展示を行なうことは固有の課題になっていると言える。また、展示＝博物館という発想に当の博物館関係者から疑義が表明されていることを考えれば、アーカイブズや図書館が展示を行なうことは、本来の業務を損なうものとして否定すべきとは限らない。

歴史学研究会編集の『歴史学研究』が「博物館展示の可能性―展示叙述の可能性^③―」という特集を組んだ中でアーカイブズでの展示に関する論稿^③を掲載したのは編者の見識が評価されるべきであり、掲載された論稿は意欲的な論稿であるが、「アーカイブズ学における展示論」を展開する著者の主張は、アーカイブズ学に固有の方法・議論としなければならないのかや疑問が生じる。著者はアーカイブズ学の領域について「管理研究」「資源研究」に区分する先行研究を継承し、アーカイブズでの展示についてもこの区分で議論する。著者の区分が有効でないとは考えないが、博物館におけるバックヤード展示、収蔵展示などは同様の理解と方法に基づいていると考えられる。アーカイブズにおける展示にあえて他と異なる方法論を求めるのではなくても、資料収蔵機関における展示という外枠を設定し、その上でアーカイブズ固有の展示方法論を見出していくことができれば、そのように試みることも可能と考える。

アーカイブズにおける展示活動もまた、アーカイブズにおける調査研究活動の成果の社会への発信である。そのように理解した上で、前述のアーカイブズの社会的認知に対応する活動として、アーカイブズの展示活動を広報活動に目的を置いたものとして捉えてみたい。

アーカイブズでの展示活動が担うのは

- ・アーカイブズ設置母体についての広報活動
- ・アーカイブズの業務についての広報活動

の二つの目的が考えられる。前者は字義通りであるが、後者はアーカイブズという施設・機能・文化についての社会的認知が低い現状に対してアーカイブズそのものを紹介する目的を持ち、また収蔵史資料の紹介によりアーカイブズそのものとともに当該アーカイブズ自身の広報を目的とし得る。前者については、アーカイブズがそれを担う必要はないという意見が予想されるが、理想としては、根拠のない活動指針より過去の実績が証拠とともに確認できれば、よほど信頼性のある広報活動となり得る⁴⁾。

以上の議論を大学アーカイブズに即して捉え直すと、前者は、大学アーカイブズ収蔵史資料によって大学の活動、とくに教育研究活動の実績についての広報³⁾となり、後者は大学アーカイブズ収蔵史資料についての理解を得ること、アーカイブズ利用や史資料収集の機会を増やすことにつながるものとなる。とくに、自校史教育を論点の一方の柱とする本稿では、ここでいう大学アーカイブズ収蔵史資料には、大学史資料と認識されてきた史資料、業務文書に含まれるか否かが議論される教育研究に関する史資料が積極的に含まれる。

大学の教育研究活動に着目すれば、必ずしもアーカイブズだけが担うものでもない設置母体についての広報活動は、大学アーカイブズが行なうことがふさわしい。イメージ戦略を広告代理店に依頼するよりはるかに教育研究

機関に相応しい広報の方法であると言える。また、教育研究に関する史資料が少ない場合の自校史展示では、大学の特色を出すことも容易ではないであろう。学生の課外活動に関しても「教育」に関する史資料として利用し、大学の特色を出すことが期待される。

このように広報活動としても期待できる大学アーカイブズの展示活動に敢えてアーカイブズであることの特色を求めるのであれば、収蔵史資料との関連を持った展示によって利用の拡大を図り得る点にある。展示される史資料の点数には限度があるが、見学者が展示を見て関心を持った史資料の関連資料をアーカイブズで閲覧することができれば、利用の機会が広がる。何より、どのような史資料がアーカイブズに収蔵されているか、その一端を見ることができるのであるから、見学者はアーカイブズの収蔵史資料を通してアーカイブズの機能の一端を知り、収蔵史資料が個別に閲覧できるものであることを知ることができる。

このような展開が可能であるためには、アーカイブズでの展示では基本的に収蔵史資料を用いて展示を組み立てるべきであり、展示のためだけに借用した史資料によって展示を構成することは、アーカイブズの業務目的に即しても適切ではない。資料情報の共有によって当該アーカイブズにない史資料であっても、所蔵機関で閲覧可能と考えることもできようが、関連資料が資料閲覧への対応を業務としない施設に収蔵されている場合、閲覧が困難となる⁶⁾。ここに、収蔵史資料によって展示を構成すべきアーカイブズでの展示活動の特色がある⁷⁾。

そして、広報活動は大学内部に対しても行なわれるべきである。教育研究に利用するためにも、まずは資料の所在が知らなければならない。研究者であっても専門分野が異なれば、途端に基礎的な情報もわからなくなる。残念ながら、資料の所在を知る手段は、専門外にはなかなか知られていないことを認識すべきであろう。

二 自校史／自校教育

1 自校（史）教育の目的

大学における自校（史）教育は名称の浸透度に比して、位置付け・性格についての共通認識は形成されているとは言いがたい。自校史教育はオムニバス形式をとることが珍しくないが、担当者間で意見が異なる場合があることを実践報告の中に読むことも珍しくない。

目的は多様であつてよいと思われるが、根本的な相違として、自校史教育と自校教育とは「史」の一字の有無によつて目的が大きく異なることが想定される。大学史編纂事業の発展として位置付けるのであれば自校史教育となる、と簡単に割り切れるものではない。大学史編纂事業とその成果である年史の意図する目的が、すでに多様である。あるいは、年史の叙述形式に大きな違いがある。ひとつの大学の年史の中で、ひとつの学部だけが叙述を行わず、年表の掲載にとどめた事例があるように、ひとつの大学の中でも年史の意味付けには差異がある。それが叙述のための長い過程であるとされるのであれば、最終的な目標は変わらない。同様に、自校史は自校についての歴史的理解であり、自校史教育は自校教育に収斂すると位置付けられる。しかし、目的を考えた場合、自校史教育は自校教育の下位概念とはならない。⁽⁸⁾

自校教育では、帰属意識の涵養、アイデンティティの回復などが重視される傾向にある。⁽⁹⁾ 不本意入学した学生はどこかの大学にも生まれる。自校教育には、彼・彼女らのアイデンティティ回復が期待される。共同体に帰属しなければ回復されないアイデンティティに「個人」は存在するのであるのか、という疑問が意味をなさない状況でもアイデンティティの回復は求められ、そのひとつの方法として自校教育が行なわれる。それは、大学に所属する者に

は、方法として否定し難い。大学教育の目的が多様化したように見える現状では、そのような教育も可能とみなされよう。それが有効な成果を挙げるのであれば、なおさらである。

こうした議論では、自校（史）教育の目的は、教育する側が目的を設定している。今日の大学は、どのような目的の下にその授業が開講されるかの明示が求められる。それが受講の場合のガイドとなることを否定しないが、受講者の側の目的がそれに合致しているとは限らない。異なる受け取り方をされたとき、担当者はむしろそれを評価するのではないか。「史」の一字にこだわった授業が展開されて、しかし、それを自校教育と受け取る学生がいる可能性は否定できない。あらかじめそうした理解をシャットアウトし、評価しないことを明示しなければ、受講者の側の受け取り方は規制されない。しかし、それを規制し得るのは、特定の分野の基礎教育である場合に限られるのではない⁽¹⁰⁾。

以上のように考えると、自校史教育と自校教育に厳密な区分を設けない発想も許されよう。過去を安易に持ち出して充足するのはむしろアイデンティティ回復の障害となる可能性が高いが、その点に注意を払いながら、以下では自校教育の可能性を含み込んだ自校史教育について考えていくこととしたい。

あらためて自校史教育の目的を考えると、大学教育の基礎という性格付けが可能であり、あわせて、やはり帰属意識の涵養、アイデンティティの回復が期待されよう。そして、特定の分野―歴史学あるいは大学史そのものの基礎的訓練の場とも考えることができる。

大学における基礎教育として自校史を位置付けるとは、自分がそこで学び、場合によっては研究する場となる大学とは何か自校史を素材に考えることである⁽¹¹⁾。大学で学び、考えることについての「教養」を制度化して学ぶこと、あるいは、大学で生産される知の基盤の形成を歴史的に考えると言い換えることができる。ただし、このような

位置付けの場合、基礎教育では終わらない可能性もあり、初年次教育に限定しなくてもよいであろう。

大学史についての（無）理解が影響し、自校史教育は大学の授業足り得るかとする否定的な意見もあるが、知の技術・技法を伝えることだけが基礎教育ではなからう。大学史または歴史学のように特定の分野の基礎としてではなく、「知」の基盤として「大学」を考えたとすれば、全学年を対象にして「基礎」教育を行なうことができよう。⁽¹⁾ただし、根拠に踏み込んでその分析手法から考えたとすると、歴史学的手法に負うことが多くなる。自校史といえども「史」であることを踏まえれば、当然の帰結であろう。これを大学史という専門分野の基礎的訓練としないのであれば、史料の読解力を目指すのではなく、史料から抽出された諸事実を整合的に再配置する論理構成に重点を置くべきことになる。それを可能な限り広い分野で試み、特定の分野の学史として完結させないことが求められよう。そして、それらの対象が自校であること（最低限、自校に関わること）により、学知の系譜に自らがつながり得ることが実感されれば、情緒のレベルでも「大学」という「知」の場を認識することになる。これをアイデンティティの回復への契機とするのは、研究者の視線に偏りすぎていると批判されようが、大学においてそれを行なわないことは果たして適切であろうか。⁽²⁾

2 自校史教育と「負の歴史」

帰属意識の涵養は、大学経営の視点からは歓迎される。寺崎昌男が紹介する、酒屋でアルバイトをする学生が校歌を知らないことをOBから怒られたというエピソード⁽³⁾は、卒業して時間が経つほど母校の存在が大きな意味を持つことを示していると読み替えることが可能である。このような、自校史を知りたいという卒業生からの要望が、学外で行なわれる個別学校沿革史展示の背景にあると考えられる。こうした要望とそれに対応する大学の思惑を考

えたとき、また、現在・未来の学生へのアピールを重視したとき、否定的なイメージにつながる可能性を持つ「負の歴史」の扱いが問題とされがちである。

この点で、自校史教育の中で「負の歴史」を扱ったことへの受講生の反応を紹介した小宮山の論稿から、指摘できることがある。「負の歴史」を知ることによって自校に否定的な印象を持った学生の場合、多くははじめから理想化された自校（史）像を持っていることが、紹介された事例から読み取れる。自校に対してニュートラルな状態の学生であれば、「負の歴史」から自校に対する否定的な印象を持ったとしても、その落差は、はじめから自校を理想化している学生よりは小さい。落差の差は程度の差でしかないが、学生が自校を理想化しているとき、その根拠はどのようなものであろうか。入学する大学についてどのような情報を得ているか、思い付くものの多くは根拠の曖昧な印象・評判か、特定のデータに基づいて作られた偏差値という指標であろう。それに、近年は当の大学が展開している広報が付け加わる。それもまたイメージ優先であり、伝えられる情報は当然限られている。あることがらを伝えようとするとき、より分かりやすく伝えることは重要であるが、伝えられることがあまりに少ないとき、伝わるのは、内容であろうか媒体であろうか。

このように考えると、曖昧な根拠によって理想化された虚像が研究に基づいて構築された歴史像によって修正されることは、不適切であるとは考え難い。むしろ、教育と研究を行なう場である大学において、「負の歴史」を隠ぺいすることは是とするのは、受講生を貶める発想である。^⑩

ひとつの事例を紹介したい。^⑪私は、勤務先で「博物館実習」のひとつを担当している。この授業は、受講生がグループを作って展示を企画作成し、その成果を公開している。その中に大学史という主題の中からのテーマ設定がある。個人についての情報が開示されることになり得るので、テーマ設定と展示内容について私から示唆すること

もあるが、基本的には学生主体の展示作成である。その中で学生運動が扱われた。

受講生たちはやはり学生の視点から、先輩たちの主張を読み取り、これを基軸とした展示を作成した。展示終了後の合評会では、かつての学生たちがこの大学で自らの主張を示し、そのための活動を行なったことについて「考えてみてほしい」と展示が結ばれていることに、突き放した言い方であるとの指摘が他の受講生からなされた。この指摘はやや意外に受け取られたらしい。展示を作成した受講生グループは、結論を明示しないことを自分たちの方針としていた。展示そのものは、自分たちが実物をみたことがない立看を自作するほどに力が込められていたが、展示対象の担い手に自分たちを同化させることはなく、その当然の帰結として、結論＝評価は保留されたのである。展示に使用できる史資料については予め制約していたので、ハードルの高い展示作成となることをこの展示グループは理解していた。にもかかわらずそのテーマを選び、展示を対象化することができていた。論者によっては「負の歴史」のひとつに挙げられる学生運動について、現在の学生はそれを歴史的な事象として対象化できるのである。これを、学生運動はもはや歴史的な出来事として認識される対象となったと見ることは可能であるが、そうであるなら、「負の歴史」はリアリティを持たない歴史的なひとつの事項に過ぎず、問題にする意味もないことになろう。⁽¹⁸⁾

この展示には後日譚があり、公開講座の受講生が偶然この展示を見て、そこに亡くなった配偶者の姿を認めた。その受講者は他大学の卒業生で、その頃から交際していたので、着衣と後姿からわかるということであった。ピンとがやや甘いうえ、多くは後姿のため、識別できるほど顔が写っていない。その写真は『南山大学五〇年史写真集』にも掲載されている。その受講生からもクレームの類はなく、むしろ故人の懐かしい姿を見たという思いが伝えられた。この話を聞いた展示グループは、過去の事象が現在につながっていることを再認識したことであろう。しかし、授業の最後に提出する展示記録でも、結論を保留する姿勢は維持された。自校史に真摯に向き合う学生は確実

にいる。偶像崇拜を保護するか、過去を相対化する姿勢（できる能力）を尊重するか、結論は明らかである。⁽¹⁹⁾

後日譚からわかるように、学生運動もひとつの大学では完結しない。つまり、大学は社会的存在なのである。したがって、大学における「負の歴史」もまた、社会と無縁ではない。むしろ社会と真摯に向かい合ったからこそ、大学に「負の歴史」が刻印されたと言えよう。とすれば、大学にとっての「負の歴史」を抹消することは、社会的存在としての大学の歴史を抹消することにつながるものと考えざるを得ないのである。

三 展示の利用

自校史教育に展示を用いることの意義・効果について、現在まで議論が十分蓄積されているわけではないが、キヤンパス・ツアーなどの実践も加味すると、「モノ」「現場」を見ることで学生の関心が惹き起こされる傾向は強い。自校史教育を大学史編纂の次のステップと考えたとき、分厚い大学史本文編、文字資料によって構成された史料集は前提となるが、「モノ」を利用することによって、それらでは得難い効果を期待することは容易である。「わかりやすさ」「興味・関心を惹きやすいこと」が重視されるが、それだけでは「知」の基礎は伝えられないであろう。展示された「モノ」はアウラをまとわなくても、多くの情報を見学者に伝える。自校史展示に用いられる文書資料の場合、精巧にオリジナルを再現したレプリカないし複写資料からも、文字列への変換では伝えきれない情報を伝えることができる。

自校史という枠組みであれば、展示されている「モノ」の多くは、現在の自分たちの周りに存在する「モノ」そのものか、その前身である。学生たちは、手持ちの知識を動員して、展示史資料について想像することができる。

展示される史資料は、本来の文脈から切り離され、展示という新たな場で機能する。自校史の場合、「モノ」を見て、それが利用される／作成される場面を自分の経験に照らしながら再構成することが可能であろう。学内に学生運動の際の落書きの跡が残っていることや、図書館の蔵書に「名古屋陸軍幼年学校」の蔵書印が捺されているものがあると知って、それを確かめに行く学生は、過去を伝える史資料が現在もそのままにあることを確認し、歴史と現在のつながりを体感するものと思われる。そのような情動が、卒業生においては「懐かしい」という表現になるのではなからうか。展示されている史資料をかつて置かれていた文脈におく、すなわち、忘れていた過去を現在の意識の中に再構成＝歴史化できたとき、「懐かしい」という表現が与えられるように思われる。ただし、「モノ」は展示のすべてではなく、このような議論は「モノ」のイメージ喚起力に依拠しているのみに批判されようが、展示は「モノ」を展示する」「モノで展示する」ことに特徴があり、「モノ」を抜きに語ることはできない。

しかし、「モノ」によって歴史とのつながりが認識されたとき、それは対象化された史資料を再びかつての関係の中に戻すだけではない。現在の自分によって、あるいは習得された知識によって、過去そのものではない「歴史」が構築されるのである。「考えてみてほしい」という呼びかけに応えるとき、現在にいる自分が歴史と向き合う。

具体的な方法について。大学における自校史教育では、受講者数に制約され、授業の一環として全体で展示を見学することは困難なことが想定される。したがって受講生ひとりひとりが見学するという方法を取ることが現実的であり、大学ではこのような方法を取ることが可能である。その場合でも、展示されている「自校史」を現在と断絶させないで見学する指向を維持させることが重要となろう。これは対象化を否定するのではなく、現在を対象化するために、歴史からの視点を持つことを示唆するものである。現在を所与の前提としないための方法として、歴史がある。現在とは異なる自校の姿が現在の自校を対象化するだけでなく、異なる姿からの変化が現在の自校を

作り上げているという理解に至るには、現在とつながっていることが大前提となる。展示されている「モノ」をかつての文脈に再配置して構成された歴史像と、現在との間は必ずしも直線的につながらない。その間を埋める想像力が肝要となる。

おわりに―展示制作後の反省と課題

最後に、南山アーカイブズ常設展示室の開設に携わった者として、反省点と今後の課題を示しておきたい。展示については、事実Ⅱ「結果」を羅列したため、予定調和的に展開した歴史像となってしまうことは否めない。限られた展示スペースの中に、それでも網羅的な展示にならないことを前提としていたが、結果を見ると、南山学園の歴史はほぼ順調に展開されてきたように見られるであろう。実際には、いくつもの時点でいくつもの可能性があったはずであり、それらの中からひとつが選択されてきた結果、今日の南山学園が形成されてきた。そのような歴史を体感できるような、動的な歴史展示でなければ、歴史と現在に架橋することは難しい。

歴史を現在から見ることは不可避であるが、選択が迫られる現場への共感⁽²⁰⁾は、歴史への想像力の基礎として必要である。そのような視点の獲得によって、「負の歴史」への理解も深化する。その時々⁽²⁰⁾の「可能性」を見せることは、実は、さまざまな選択の過程を知ることができるアーカイブズ資料（とくに組織資料）を利用することで可能になるのではないかと考える。あるいはアーカイブズにおける展示は、そのような「可能性」を期待すべきではないかとも言えよう。

さらに、自校史教育の性格を兼ね備えた授業の試みとして、自校史展示の準備に学生の参加を得ることができ

ば、より大きな効果が期待される。具体的には、博物館実習の一部としての自校史展示である。すでに紹介したように、学生は自分が所属する大学を題材とすることに関心を持ち易く、その一方で、学生運動などを対象化できる。展示を見学する学生も、同じ学生が作った展示であることに関心を持ち得るであろう。とすれば、関心を共有しつつ、展示を作成する側と展示を見学する側の対話の可能性が生じる。⁽²⁾ また、展示対象に含まれるであろう学生と展示を作る学生とが、当事者性においてどのように重なるか問題であるが、自校史という枠組みは、暗黙の裡にこの難問を回避してしまっている。フォーラムとしての展示実践を試みることで、これらの批判的検討が可能になるのではないかと考える。南山アーカイブズにおいても企画展の方法として考えるべき課題である。

註

- (1) 近年、いくつかの大学で大学キャンパスを離れて実施される自校史展示は、卒業生と社会一般という見学者を想定させるが、私の数少ない体験では、卒業生の見学が印象に残る。比喩的に表現すれば、展示見学という名の同窓会である。
- (2) 『歴史学研究』第八五四号・八五五号、二〇〇九年六月・七月。
- (3) 柴田智彰「公文書館の展示力学に関する一試論―アーカイブズ展示評に期待するもの―」『歴史学研究』第八五四号。
- (4) ここで、それゆえに実現不可能であると言うべきではない。それゆえに実現されなければならないというべきである。
- (5) いまひとつの目的として、建学の精神、創設の理念などを「モノ」によって表現することが挙げられる。これは展示に限らず、年史叙述や史料収集などですでに行なわれてきたことである。本来、「モノ」やテキストから抽出されてきた精神や理念を再び「モノ」に還元することになるから、これは有効な方法であろうが、理念や精神を展示から読み取らせようとするより、それらの理念や精神を基底に持った教育研究を「モノ」によって伝えるというように、教育研究の実際という媒介項を置いた方が、教育研究機関である大学にはふさわしいと考える。
- (6) 展示のために借用する際にデジタル情報化した史料資料を閲覧することも考えられるが、関連資料がカバーできるか問題であり、借用の際にデジタル化された史料資料を閲覧に供する

ことを確認しておかなければならない。

(7) 図書館での展示活動についても同様のことが言えよう。

(8) 白川哲郎「大学史料と自校教育—大阪樟蔭女子大学の場合—」「アルケイアー」記録・情報・歴史」第六号、二〇一三年三月、南山大学史料室。

(9) 『大学教育研究フォーラム』第一四号（二〇〇九年三月、立教大学全学共通カリキュラム運営センター）に収録された自校史教育についてのシンポジウムでは、帰属意識の涵養、アイデンティティの回復を自校史教育の目的とする報告者はむしろ少数派である。

(10) それでも多様な受け取り方の可能性は残る。学術的な著作でも、研究史上の課題の背後に研究者の異なる意図があることは否定されない。

(11) これは、在塚礼子・石上城之・宇佐美香代・清水章夫・高山清司・山口和孝・山田恵吾「教員養成における自校史教育の実践—埼玉大学教育学部開講科目「埼玉大学一四〇年の歩み」（『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第一三号、二〇一四年三月、埼玉大学教育学部）が、羽田貴志「アイデンティティの形成としての自校史教育と歴史教育としての自校史教育—討論に触発されて」（『大学教育研究フォーラム』第一四号、前掲）の指摘を承け、アイデンティティ形成を大学という共同体への帰属という学術的意義において評価することと重なるものである。

(12) 吉見俊哉「大学とは何か」（二〇一一年、岩波書店「岩波新書」）には、こうした意図があるように思われる。

(13) 自校史教育の目的を混乱させるという批判が予想されるが、自校史教育が方法によっては研究志向を醸成させるような可能性を持つと考えたい。

(14) 寺崎昌男「自校教育の役割と大学の歴史—アーカイブズの使命にふれながら—」（『金沢大学資料館紀要』第五号、二〇一〇年三月、金沢大学資料館）。

(15) 小宮山道夫「大学の自校教育に対する評価と認識の変化に関する考察」（『広島大学文書館紀要』第一四号、二〇一二年三月、広島大学文書館）。

(16) このような当然のことを指摘しなければならないのは、「大学史」「自校史教育」において、研究とそれ以外の場（個別大学沿革史叙述や自校史展示・教育など）での使い分けを主張する傾向が見られるからである。

(17) 岡田昌也「博物館実習における大学史展示の実践」（『アルケイアー』記録・情報・歴史」第五号、二〇一一年三月、南山大学史料室）で紹介されている。

(18) 展示をめぐる熱い議論は、多くの見学者とは無関係に行なわれるとする冷めた指摘がある（金子淳「戦争観の形成と戦争展示—「熱い論争」と「冷やかな無関心」という落差をめぐって」（『静岡大学生涯学習教育研究』第一四号、二〇一二年三月、静岡大学生涯学習教育研究センター）が、

展示を作成する側の主体性と責任の放棄は、教育の場で取るべき態度ではない。博物館ももちろん社会教育の場である。

- (19) 「負の歴史」を扱わないという姿勢は、自校史教育という場の問題に解消されるものではなく、歴史をどのようにに叙述するかの問題として考えるべきである。否定的なイメージは、「負の歴史」によって喚起されるより、「負の歴史」を意図的に伝えなかったことが発覚したときに強く生じるのではないか。「過去」ではなく、「過去」に対する現在の姿勢が問われているのである。ただし発達段階によって内容を考慮すべきことは否定しない。

- (20) この共感はずは選択が迫られる場の当事者に向けられ、それすらも容易ではないと考えられるが、その達成にとどまらべきではない。当事者の選択によって影響を受ける、その場がない人々を想像することができなければ、当事者への共感としても薄弱なものになるのではないか。

- (21) 自校史教育の一環として、学生が作った展示を見学して意見を持った場合、それを直ちに展示に反映させることは困難でも、ひとまずの議論は可能であり、それらを蓄積すれば、展示を作る側に考える材料を提供することになる。

- (22) これは、吉田憲司『文化の発見 驚異の部屋からヴァーチヤル・ミュージアムまで』第四章「民族誌展示の現在―「異文化」と「自文化」のはざままで」および終章「次代のミュージアムにむけて―ささやかな提言」(一九九九年、岩波書店、なお第四章の原型初出は一九九八年)で、キャメロン・ダuncanの提唱として紹介されたテンブルとしてのミュージアムからフォーラムとしてのミュージアムへとという指摘に准えたものである。最近では、竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の歴史戦争・公害・疾病・災害…人類の負の歴史をどう展示するか』(二〇一五年、東信堂)が、フォーラムとしてのミュージアムの可能性を積極的に検討している。